



「ったく……あのクソ部長が。」

自分のミスを俺に押しつけやがって……」

何時間もの残業を強いられた帰り道――

あなたは苛立ち任せに足元の空き缶を蹴飛ばした。

せつかくの花金だというのに気分が台無しだ。

こんなときはソープにでも行って憂さ晴らしをするに限る。

そう思って風俗街へと足を運ぶと……



「女の子が欲しいなら、うちらとしようよお♡
安くするからさ♡」

「ねえねえ、そこのおにーさん♡
もしかして今からフーズクですかあ？」



声をかけてきたのは、

いかにも生意気そうな二人組のJKだった。

ガキに用はない——最初はそう思ったが、

彼女達の豊満な身体を見た途端に

あなたは目の色を変えた。

はち切れんばかりのおっぱいにおうちむちの太腿。

制服の上からでもひと目でわかるほどのドスケベボディだ。

「おお……いいねえW

是非ともお近づきになりたいなあW」

あなたは二つ返事で彼女達を買うことにした。

「やったー♡ 行こ行こ♡」

「二人でたあっぷりサービスしますね♡」

「おっ……ほほほW 堪んないなこりゃW」

少女達が左右からあなたの腕を取り、

デカパイが「むぎゆう♡」と押しつけられる。

来た道を引き返し、ホテルへと一直線だ。

その道すがら、少女達は内心であなたのことを嘲笑っていた。

(うふふ……悪く思わなくてくださいね、お兄さん♡
これも社会勉強ですよ♡
せめてものお情けに、こよ達のおっぱいの感触くらいは味わわせてあげますから
後でシコるときのおカズにでもしてください♡)

(ちよっろー♡
あんたみたいなおっさんと寝るわけないのに、まんまと騙されちゃってさ♡
いつもみたいにおホテル連れ込んで、シャワー浴びさせて、
その間にお財布ゲットしてとんずら……うふ、楽勝うー♡)



「んおおッ♡ オッ♡ おほおオオオ♡」

ラブホテルの一室に、下品なオホ声が響き渡っていた。
「曲がりなりにも援交を持ちかけてきたギャルがまさか処女だったとは……ツイてたなあW初物なんていつ以来だ？ いやあ締まる締まるW」

「や、やめっ♡」もう、許ちて♡
「こんこよ、助け……ッ♡」

「はわ……
はわわ……ッ」

すっかり腰を抜かしたこよりは目の前でレイプされる親友を呆然と眺めることしかできないでいる。



「な、なんて……♡
こんなはずじゃ……
なかったのに……ンほおッ♡」

あなたは、メスガキどもの
稚拙な作戦など完全に見抜いていた。

だからシャワーを浴びる前に「まずは乾杯」と言っ
て、二人に酒入りのジュースを飲ませておいたのだ。

その効果はすぐに表れた。

「ふああつ……♡
頭、くらくらするよお♡」

この通り、クロエはすっかり
酩酊して酔いどれまんこを
差し出すことしかできない。

おっ♡
おっ♡

えっ♡

えっ♡

ん♡

ん♡

ん♡

「ク、クロたん……ッ。
ま、待ってて……
すぐに誰か呼んで……あ、あれ？
足に力が……入らな……」

こよりも、既に酔いが回ってこのザマだ。

「んはあアン♡
も、もう抜いてえええ♡ おちんちん嫌なのぉ♡」

「おいおい、何が嫌なんだ？ 話を持ちかけてきたのはお前らの方だろ？」

「ち、違あ……こんなはずじゃ、なかったのぉ♡」

「じゃあ、どんなはずだったんだ？」

「そ、それはあ……♡」

「大方、俺がシャワーを浴びている隙に
金だけ持ち逃げしようとか考えてたんだろ」

「あ、あ……あううう♡」



「つたくよお……処女ガキの分際で
人様を手玉に取ろうなんてなあ、
百年早えんだよ！ おら、おら！」

「あヒイイイン♡ ご、ごめんなしやい♡ ごめんなしやい♡」

「で、なんだったっけ？
確か、十万ぽっきりでゴムなしナマ中し放題だったよな？」

「あっ♡だめっ♡なかは、やだっ♡」

「心配すんなよ、金はちゃんと払うってw」

どきどき

どきどき

どきどき

「い、いらない♡
お金もう、いらないから♡
おまんこ中出ししないで♡」

「そうはいかないなあ……
口約束も、歴とした契約なんだぜ？
俺はちゃんとクロエちゃんに約束通りの額を払うんだから、
そっちもきっちり孕んで貰わないとな？
ま、これも社会勉強と思ってくれやw」

「やだやだやだ、やだああ♡
おじさんの精液で孕みたくないのお♡」

クロエは逃げ出そうとして身体を振るが、もちろん無意味だ。
乳や尻がいくらデカくても、所詮は148センチのミニmamボディ――
あなたの腕力に敵うはずもない。

その肉棒は次第にびくびくと震え始め、
射精の前兆にクロエは怯えた。

「あんっ♡」おじさん待つてえ♡
おちんぽ、震えて……
さ、沙花叉の中に、出そうとしてるう♡
らめええ♡」

「おお、クロエちゃんの中に
どぴゅどぴゅ出してやるぞw
最近忙しくてシてなかったからなあ……
金玉にどんだけ溜まってんのか
自分でわからねえやw」

「や、やだっ……そんな濃ゆいの
出されちゃったら、絶対に……♡」

「ま、妊娠確定だろうなw」

「いやああアン♡」

「自分で言い出したことだろが？
恨むなら自分を恨みな！」



「やああ♥」おちんぽ抜いてえ♥
ね、ねえおじさん♥「許してよおお♥
あ、謝ってるじゃん♥」ねえってばああ♥

どびゅるっ♥
ぶびゅびゅびゅびゅ♥
ぶびゅううううう——ッ♥

びゅん♥

びゅん♥

やんちゃ

おまんこ♥

おまんこ♥

びゅん

「おほおおオオオオオ♥
らめええ出さないでえええ♥」

必死の懇願も虚しく、
クロエは熱々の子種汁を子宮にたつぷりと注がれてしまう。

あなたの腕の中でぐったりと仰け反りながらアへ顔を晒し、
その小さな身体を孕み袋に変えられてしまった。
虚空を見詰めるその表情は、この現実を飲み込めずにいるようだった。

最後の一滴まで出し尽くすと、
あなたはクロエをベッドに投げ捨てた。

みつともなく足をおっ広げ、
目を回しながら「あへええ……♡」とか呻いている。

「さて、と」

振り返ると、こよりの尻尾の毛が
びくうつと逆立った。

「ひ、ひええ……」

腰を抜かしながらも、
床を泳ぐようにして逃げようとするこより。

そのパンティはいつの間にかびつちよりと濡れていた。
どうやら、次は自分がレイプされる番だと察して
小便を漏らしていたようだ。

あなたは三步でこよりに追いつくと、
その身体に覆い被さった。

びちよ濡れパンツを横にずらし、
メス穴に亀頭を突きつける。

「ほうら、挿れるぞ
こよりちゃんのおまんこも
いっぱい使って上げるからねw」



「ま、ま、待つてくださ……
こよりも、その……
ハ、ハジメテで……だから……ンおおおおおおおッ♡♡♡」

なんかぐだぐだ言っていたが完全に無視だ。
あなたの凶悪な逸物は、こよりの膣膜を簡単に突き破った。
そしてすぐさま、
容赦のないレイプが始まる。

相手が処女だろうと関係ない。

安物のオナホを使い潰すときと
なんら変わらない感覚で、
こよりのデカケツに何度も
腰を打ちつけた。

「ぐふ、やっぱりこっちの穴も
初物かあ……
期待通りで嬉しいなあw」

「ンおっ♡
おほっ♡ おっ♡
そんな♡
こよの、ハジメテ♡
う、奪われ、ちゃったあ……♡」



「ほうら……この形、よく覚えておけよ？
お前らを女にしてやった
旦那様のちんぽなんだからなw」

「ふえっ♡
だ、旦那って、どういう……♡」

「一緒に子作りして
赤ちゃんを作った仲なんだ。
旦那くらい名乗ってもいいだろう？w」

「んひい♡
そ、それって、まさかあ……
クロたんと同じことを、
こよりにも……♡」

「そらそうだ。
クロエちゃんだけなんて
不公平だろお？
だからここは、
二人仲良くママにしてあげるねw
十万ぼっちで美少女JKを二人も
孕ませられるなんて……
いやー安い買い物だぜw」

「そ、そんなの……
絶対めれすう……♡
こよ……まだ、ママになんて
なりたくない、おっほおッ♡」

その言葉とは裏腹に
こよりのおまんこがきゅんきゅんと
吸い付いてくるのをあなたは
感じていた。



「お、おにーさ……♡
ゆるっ、許して……くだ、さいい♡
ほ、ほんの出来心だったんですう♡
もう二度とこんなことしませんからあ♡
中に出すのだけは許してえ♡
処女穴レイプだけで勘弁してくださいい♡」

「そうは言うけどさ……
さつきから自分で腰動かしてるの
気づいてる？w」

「へっ……あつ、これは♡」

「デカ尻をぐりぐり押しつけちゃってさ。
本当はこよりちゃんも
中に欲しいんだろ？w」

「ち、違います♡
違うんですう♡
これは、身体が勝手にいい♡」

「お、締めつけが増したぞお……
やつぱり孕む気満々じゃん。
こんなのもう抜こうと思っても抜けないぜ？
抜こうとすると、ほら……
まんこの肉がどこまでも
吸いつきやがるw」

「んっほおオオオ♡
お、おまんこ、めぐれりゅうううう♡
おにーさんの形にされて……
も、戻らなくなっちゃいますううう♡」



膣穴の締めつけが最高に達すると、
こよりの股ぐらから「ぶしゃああああああっ♡」と
大量の潮が噴き出した。

尻尾や耳をぴーんと伸ばして、
まさしくメス犬さながらの喘ぎ声を甲高く発する。

「おっと、こりやまた派手にいったなあW
そんじゃ俺も、そろそろ……」

「はうっ♡ 待ってえ♡
出さないでえ♡」

「こら、なに逃げようとしてんだ！
旦那様の子種をありがたく
受け止めんか！」

「や、やだよお♡
こよりを勝手にお嫁さんにしてないでえ♡」

「ぐっ……きたきたきた！
精液上ってきた！
出すぞ、こより！」

ゴキ
ゴキ

むぎゅ
むぎゅ

あっ♡

っ♡♡

「らめっ♡ らめええ♡
中はらめえええええ—— ツ♡♡」



「おっ、ほオオオオ……♡
だひやれ、ちやつ……たあ……♡
らめつて、ゆつたの、にいい……♡」

その白い波は瞬く間に子宮を埋め尽くし、腹が膨らむほどに押し詰められてもなお、絶え間なく放精を続けた。

「くうう！」

さすがは現役JKのナマまんこだ……
さつきあんなに出したのに
射精が止まらねえや。
ああ、出る出る……
やつべこれ、金玉の中身吸い出されるわw」

「いやアア……♡
もう出さないでえ♡」

飞砂走石

あなたは恍惚の表情を浮かべて、
肉欲の赴くままにザーメンを吐き出し続けた。

これであなたが満足してくれたなら、
彼女達にとっては不幸中の幸いとなつたろう。
だが、あなたのちんぽはまるで萎えることなく、
雄々しく天を向いたままだった。

それもそのはず――
こんな、ハメ心地抜群のドスケベJK二匹を前にして
一発二発の中出しくらいで誰が満足できよう。

クロエやこよりはぐったりと仰臥して
「もう無理ですう♥」という顔をしているが
許してやる理由はない。

十万ぼつきりで、
ゴムなしナマ中し放題。

これは他ならぬ
彼女達が持ち替えてきた話だ。

だからあなたには
彼女達のおまんこを使う
正当な権利がある。

夜はまだ始まったばかりだった。















